
sky

犀龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

sky

【Zマーク】

Z7643P

【作者名】

犀龍

【あらすじ】

あなたは、空を見るのは好きですか？

あなたは、魔法使いを信じますか？

(前書き)

かなり、短くて支離滅裂かもしませんが、何となく即興書きしたのを掲載します。

本当にこんな時代がくるとは夢にも思わなかつた。

科学が常識の世界に夢のよくな……だけど、現実の感覚。

俺は今、夜の空を舞つてゐる。

それは数分前に遡る。

家のベッドで寛ぎながら本を読んでいると、突然にガタガタと周りの空気が震えだした。

最初は氣のせいだと想い氣にはとめていなかつたのだが、その振動は徐々に大きくなつていく。

俺は慌ててベッドから起きあがつた瞬間……

「あやあああああ！」

轟音の中に小さな悲鳴が聞こえた瞬間、天井が崩れ去り部屋が煙

により視界が見えなくなつた。

「はう～着地失敗ですう～」 小さな女の子……中学生ぐらいの背丈の女の子が空から降つてきた。

「いやいや、何かの特撮か！？」

この科学の世界に篠に跨いで落下する女の子つてあるか？

これはもう特撮としか考へるしかないだろ？

「…………あつ…………」

次の瞬間、その女の子と目があつた。

「…………えつと…………」

俺もなんて声をかければよいのか考へが出ない。

「すいません…………」

「はい？」

「納豆にネギ入れる方ですか？」

「いえ、俺の家はパセリとチーズを好んで入れます

…………つて、なにを答えているんだ！？」

とりあえず、別の部屋に行つて話をすることにした。

「血口紹介からしますね……私は【リーファ・フォルティア】です。リーと呼んでください」

「黒崎 遠矢だ……あの天井の穴と君について聞きたい」

その言葉にリーファは苦笑いしていた。

「飛行の訓練していたのですが、渡り鳥にぶつかりそうになってしまって、バランスが戻らないままそのまま急降下してしまいました」

「……よく無傷だったね」

「落_トする事は、いつものことですから」

笑顔で質問の答えを返してくれた。

笑顔で答えることではない氣もするのだが……

「で、屋根に『デカイ穴をあけたわけか……」

とりあえずは応急処置で雨が降つても大丈夫の状態までにはして

おいた。

屋根が斜め型じゃなくて良かったと心から思った瞬間でもあった。

「こんな時代に魔法がある方がおかしいぞ……今は機械で空を飛べる時代だ」

まあ、こんな冷静に述べてこるのは、また不思議な現象を何回か経験しているからであるのだが、その事については伏せておこう。

「ティステイアはこの世界のズレた場所に存在する王国ですし、ミティアの民がフェリスの民の世界に干渉するのは不可能に近いことですから……」

笑いながらそう答えていた。

「うちの周波数と、向こうの周波数のピントを合わせれば行くことができるなんだよな?」

「わつですよ~ナビ、それはそれで……」

その言葉でリーファは話が止まった。

「つー、何でミティアの民がその事を知ってるんですか!?

「……まあ、そっちに知り合いか居るんだよ。法使いではないんだが」

いや、つっぱな魔法使い(?)だな。

四属性を使いこなせてもらひるじ。

「……その話は聞かない方が良いかもしませんね」

姉さんといふ事はどうあえず話さない方が身のためだな？」

「では、お詫びに私が空に招待いたします」

眩しい笑顔でリーファは、無理矢理俺を簾に跨らせた。

「ちよ……まつ……！？」

「テイクオフですう～！！」

次の瞬間、二人は夜空に舞い上がった。

「うわああああ！」

しかし、重力のあるかと思ったが、それが一切なかつた。

「重力負荷は無いですよ。魔法で中和しますし、空気もちゃんと供給するようにしてるので大丈夫ですよ」

そして、ゆっくり田を開けると、星が瞬いていた。

普通ならこんな風には見れない。

やはり、地上の光で見えなくなっていたのだろうか。

「私はこの風景が好きです……住む星が違いますけど、星空の風景は好きですよ」

俺は、その言葉を聞いた直後、意識を失った。

他の誰かが、したのか分からぬが起きたときはベッドの上だった。

天井も、いつの間にかいつもと変わらない天井に戻っていた。

あのリーファがそこに居たのかは不明であるがその日以降変わったことが一つあった。

夢かどうか分からない時間であつたが俺は近くの山と言つても頂上まで15分足らずで着く場所はあるのだが。

そこで、夜の星をよく見るよつになつた。

あの子が言つた言葉に感化されたかどうかが不明ではあるが……

また、会える気がしていた。

違う次元の中でだが。

(後書き)

force magicians 四精靈魔術師の序編みたいなものかな?

とある場所で掲載予定の物をこじらひに回してみました。

魔法物(?)のほのぼの(?)を書いてこるつもりですが……表現力が乏しいことが痛感します(汗)

誤字や脱字、感想はどんどん書いてください。

どうぞお手元だ後にがんばって成長していくことを思っています(汗)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7643p/>

sky

2010年12月31日22時43分発行